

韓国の大学における日本語の発音指導について

日本語学習者と日本語教師のビリーフを中心に

李玗兒

早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文

概要

第1章 序論

本研究は、韓国人日本語学習者と日本語教師を対象に、韓国の大学における発音指導に関するビリーフを明らかにした上で、音声教育における教師の役割について再検討し、学習者へのよりよい発音指導を考えることを目的とする。

筆者が韓国の大学における日本語の発音指導に着目した理由は、大学時代の経験からである。韓国の大学で日本語教育を専攻しており、在学中に日本語弁論大会の出場のため、日本人の教師から発音練習の特訓を受けたことがある。これをきっかけに発音の重要さに気づき、アクセントやイントネーションにより意識が向くようになり、自分が日本語を教えるようになってからも、常に発音を意識し、アクセントやイントネーションを中心に教えていた。発音指導は日本人教師にしかできないと思っていた筆者自身が、自分でも発音指導ができるという意識が変わったのである。しかし、韓国の大学では、韓国人教師が発音指導をするところは数少ない。発音に関する指導は会話の授業で必要に応じて行われ、会話授業は日本人教師が担当するのが一般的で、当然発音指導は日本人教師に任されているのが現状である。教師の指導能力というより、ただ「母語話者なら誰でもいい」「発音に関しては母語話者に任せる」という意識が強いからである(呉2006)。また、日本語学習者からも母語話者に対しては発音の期待度が高い反面、非母語話者には発音より文法の期待度が高い(辛2006)。しかし、韓国人学習者が日本語の発音に対してどのように思っているかわからない状態で、何でも日本人教師任せという非体系的な指導だけを重ねても韓国の音声教育の発展は期待できない。また、大学側も学習者の発音に対するニーズや発音指導に対してどのように思っているかきちんと把握しているところはないと言っても過言ではない。よりよい発音指導を行っていくためにも、教師側と学習者側の発音指導に関するビリーフを総合的に考察する必要がある。

そこで、筆者は韓国の大学における日本語の発音指導の問題点に着目し、韓国人日本語学習者、韓国人日本語教師、韓国で教鞭をとる日本人教師を対象に調査を行い、教師と学習者が発音指導に関してどのようなビリーフを持っており、そのビリーフに影響する要素は何かを明らかにすることにした。

第2章 先行研究

ビリーフ(Belief(s))に関する研究は1980年代半ごろから盛んに行われ、日本語教育におけるビリーフは1990年代に入ってその概念が定着した。ビリーフは学習者の学習方略の選

扱に強く影響を与えているとされており(Horwitz1987, 1988), 学習者のビリーフを教授者が理解し, 学習者に合った教授法を選択することは, 学習者の自律学習を促進させるためにも重要なことである(Yang1999)。近年, 学習者のビリーフとともに, 注目されるようになったのが教師のビリーフであるが, 秋田(2000)は教師のビリーフについて「教師個人, あるいはその教師を取り巻く教師文化がどのような授業, 教師役割が望ましいと考えるかという教授観, 教材観, 指導観」であると述べている。また, 学習に関するビリーフは学習者の具体的な学習行動を左右するものであり, 教師においては指導方法を決定付けるものとされている(齊藤1996)。そのため, より効果的なクラス活動を促すためには, 学習者と教師のビリーフを明らかにすることが重要だと筆者は考える。

教師のビリーフに関しては, 岡崎(2001)と呉(2006), 久保田(2005)などがある。しかし, 教師のビリーフに関する研究の多くが質問紙調査による結果で, 授業の全般的なことに関する教師のビリーフや母語話者教師と非母語話者教師の比較調査である。質問紙調査は多人数に同時に実施できるメリットはあるが, 具体的に教師の指導場面におけるビリーフ把握のためには, 教師が指導する際に何を考え, その考えに与える影響には何があるかといった, 質的な分析を行う必要があると思われる。

学習者のビリーフ研究に関しては, 橋本(1993)と河野(1994), 片桐(2005)などがある。学習者に関する多くの先行研究が, 言語学習や, 学習ストラテジーとの関係, 背景と学習環境が異なっているグループの比較であり, 発音および発音指導に着目した研究はあまり行われていない。

教師と学習者間のビリーフ研究には, 若井・岩澤(2004), 齊藤(1996)などがあるが, 学習者と教師の間でビリーフの違いがあれば, それが学習の妨げになることが予想されることから, 調査結果を資料として教師の授業運営に役立てることを目的とした研究である。

第3章 調査1

調査1は, 韓国人日本語学習者(以下KS)が発音および発音指導に対してどのようなビリーフを持っており, そのビリーフに影響する要素は何かを明らかにしたものである。

調査協力者は, 韓国の大学に在籍している大学生126名である。

	人数	学年	専門	発音関連科目名	受講学年
S大学	63	2～3年生	日本語教育	日本語音声学	2年後期の選択科目
P大学	63	2～3年生	日本語	日本語発音練習	1年前期の必須科目

調査は、アンケート調査の依頼書と同意書、フェイスシートとアンケート用紙を配付し、回収する方法でデータを集めた。データはSPSSで因子分析を行い、導き出された因子はあらかじめ定めておいた要因によるt検定を行なった。

分析結果、KSの発音および発音指導に対するピリーフを構成するのは、第1因子「発音向上意欲」（「将来、今よりもっと正確で自然な日本語で話せるようになりたい」など）、第2因子「発音指導をする教師に対するニーズ」（「日本語は発音指導を受けないと自然な発音に直すことができない」など）、第3因子「発音指導の必要性認識」（「日本語の発音指導の時期は早ければ早いほどいい」など）、第4因子「コミュニケーション意欲」（「日本語は発音が不自然でもコミュニケーションには問題ない」など）、第5因子「韓国人教師の発音に対する認識」（「韓国人教師が発音指導をする場合、教師の発音が悪くても、発音の理論を良く教えてくれる教師なら大丈夫だ」など）、第6因子「日本人教師に対する姿勢」（「発音指導は韓国人教師より日本人教師がするべきだ」など）、第7因子「自分の発音に対する満足度」（「今の自分の発音に満足する」など）という7つの因子が導き出された。次に、「専門」「留学経験有無」「発音注意有無」「発音指導科目の受講有無」の4つの比較要素を設定してt検定分析を行った。その結果は以下のとおりである。

要素	有意差が見られた群
専門	第2因子(S>P), 第5因子(S<P), 第6因子(S<P), 第7因子(S<P)
留学経験	第2因子(有>無), 第5因子(有<無)
発音注意有無	第1因子(有>無), 第2因子(有>無), 第3因子(有>無), 第4因子(有<無)
発音指導科目の受講有無	第5因子(有>無), 第7因子(有>無)

第4章 調査2

調査2は、韓国の大学における日本語教師が発音指導に関してどのようなピリーフを持っており、そのピリーフに影響する要素は何かを明らかにしたものである。

調査協力者は韓国のS大学で日本語を教えている韓国人教師と日本人教師、P大学で日本語を教えている韓国人教師と日本人教師である。4名が所属している大学の発音指導に

関する科目は以下のとおりである。

大学	科目名	受講時期	必須有無	教師
S大学	日本語音声学	2年の2学期	選択科目	韓国人教師
P大学	日本語の発音練習	1年の1学期	必須科目	日本人教師

調査は、調査目的を説明してからフェイスシートを書いてもらい、インタビューは1対1で、1人の協力者につき約1時間程度の半構造化インタビューを行った。録音したデータは全て文字化し、佐藤(2008)の分析方法を参考に、分析を行った。

分析結果、S大学の韓国人教師は学生の言語習得の面より、教員養成を念頭において発音指導をし、指導法も重要視していることがわかった。また、発音指導は音声専攻者には必ず必要であるが、必須ではなくても受講希望者に教えるだけで十分だというビリーフを持っていた。発音指導は日本人教師がするのが望ましいが、韓国人教師も音声研修を受けるなどし、発音指導の重要性を認識することが大事であるというビリーフを持っていた。P大学の韓国人教師は、発音の訂正や発音練習を大事に思っており、最初の段階から発音指導を行う必要があるというビリーフを持っていた。また、日本語専攻者であるなら、必須科目として発音指導をする必要があり、授業は日本人教師が望ましいというビリーフを持っていた。さらに、教師の音声研修などを設け、発音指導の重要性を意識させることが必要であると述べた。S大学の日本人教師は、最低限のコミュニケーションのためには発音指導が必要であるが、学生が発音に対して気付く機会が少ないことが問題であると述べた。また、発音指導は日本人教師が行うのが望ましく、発音指導の授業が後回しになっているため、発音指導が受けられる授業が必要であるというビリーフを持っていた。P大学の日本人教師は、自身が発音指導科目を担当するようになってから発音に対する意識が変わり、発音指導の重要性に気が付いたと述べた。また、発音指導は日本人教師にしかできず、日本語専攻者にとっては将来とも関係があるため必要であるというビリーフを持っていた。しかし、シラバスやカリキュラムの整備が不十分さから発音指導に不安を感じ、教え方に悩んでいると述べた。4名の教師のビリーフには、教師自身の大学時代の専門と所属大学のカリキュラム、教師の母語と授業を受ける学習者、担当科目が影響する要素であることがわかった。

第5章 考察

韓国人日本語学習者のビリーフには専門と大学のカリキュラムの影響があることがわかった。S大学のKS1は韓国人教師の発音を厳しく評価し、どんな教師に発音指導を受けるのかを重要に思っており、KTが発音指導をするのであれば、音声専攻者が望ましいと思っていることがわかった。また、S大学の日語教育科では発音指導をKTが行っているが、JTへの信頼がKS2より低かったことは、KTの発音指導方法がKS1に信頼されていることでもあるだろう。発音指導科目の受講有無もビリーフに影響を与えることがわかった。発音指導科目を受講したことのあるほうが、ないほうより韓国人教師の発音により厳しく、自分の発音に対する満足度も高いことがわかった。発音指導科目を受講することが、学習者に発音に対する自信を持たせることにもつながると思われる。さらに、発音に注意しないと回答したKSは、コミュニケーションを大事に思っていることがわかった。留学経験もビリーフに影響を与えるが、日本に留学したことがあるからといって、発音指導の必要性をより意識するようになったり、JTをより信頼するようになるとは限らないことが明らかになった。

日本語教師の場合、指導法を大事に思っている教師もいれば、発音練習と言語習得を重要視する教師もいることから、教師の専門やと所属大学のカリキュラムがビリーフに影響を与えることがわかった。また、発音指導科目を担当するようになってから、発音指導の重要性に気付いたという教師がいるため、担当科目が教師の発音指導に関するビリーフに影響を与えるということもわかる。次に、学習者からの反応も教師のビリーフに影響を与えることが明らかになった。学習者が授業に積極的に臨んだり、発音に対する意識が高まれば、教師もより積極的に取り組めるようになるが、学生のほうに積極性が感じられないと教師が授業に取り組む姿勢も変わってくることがわかった。また、教師の母語もビリーフに影響を与えていることがわかった。韓国人教師も日本人教師も発音指導は日本人教師がするのが望ましいというビリーフを持っていたが、韓国人教師は、韓国人教師も音声研修などを受けることで発音指導もできるようになるだろうというビリーフを持っているのに対し、日本人教師は、発音指導は日本人教師にしかできないというビリーフを持っていた。ところが、発音指導については不安を感じ、シラバスや指導法の不十分さを指摘している。

第6章 結論

韓国人日本語学習者の発音および発音指導に対するビリーフには、第1因子「発音向上意欲」、第2因子「発音指導をする教師に対するニーズ」、第3因子「発音指導の必要性認識」、第4因子「コミュニケーション意欲」、第5因子「韓国人教師の発音に対する認識」、第6因子「日本人教師に対する姿勢」、第7因子「自分の発音に対する満足度」があることがわかった。各因子は、大学の専門とカリキュラム、発音指導科目の受講有無、発音指導を行う教師、それから日本語の発音に対する意識と日本留学経験の要素が影響を与えていることが明らかになった。日本語教師の発音指導に関するビリーフには、教師自身の専門と現在所属大学のカリキュラム、担当科目と授業を受ける学習者、教師の母語が影響を与えていることがわかった。

調査結果を踏まえ、以下のことが日本語教育に示唆できる。調査1から発音指導の能力があれば韓国人教師でもいいというビリーフを持っていることから、韓国人日本語教師も発音指導ができるように養成する必要がある。日本語教師を目指す韓国人学習者や現職韓国人教師も発音指導ができるようになると、韓国人教師の発音に対する不安も減り、評価もよくなるのではないだろうか。次に、韓国人日本語学習者に適切なシラバスや指導法、発音に関する教材開発が求められる。P大学の日本人教師は、発音指導は日本人教師しかできないと語りながらも、自分は非常に不安を感じていると述べた。日本人教師の発音指導に対する不安は、シラバスや指導法の不備から来るものであるため、母語に頼るしかない現状では、日本人教師の不安を軽減できるシラバスと指導法の工夫が求められる。シラバスや指導法、発音に関する教材開発をするためには、韓国の日本語教育の現状を知ることが大事であり、日本語教師が各教育現場で起きている発音指導の問題点を取り上げ、どうしていくべきか話し合うことも大事である。最後に、学習者のビリーフの把握のためには教師は常にアンケート調査をする必要がある。本研究では、日本語教師と学習者は単純に影響を与え合っているだけでなく、学習者の様子が日本語教師のビリーフにプラス効果を与えるとともに、マイナス効果も与えられることがわかった。しかし、調査1の結果では、S大学の多くの学生は非常に発音向上意欲も高く、発音指導の重要性を認識しているのに、S大学の日本人教師はそれが認識できていないということになる。そのため、学習者の様子で判断せず、具体的なアンケート調査により、より学習者のビリーフを引き出すことが韓国の日本語教育の実態把握に役立つのであろう。

参考文献

- 秋田喜代美(2000)「教師の信念 [Teacher's belief]」『教育工学辞典』日本教育工学会編 pp.194-197 実教出版.
- 岡崎智己(2001)「母語話者教師と非母語話者教師のBELIEFS比較—日本と中国の日本語教師の場合—」『日本語教育』110, pp.110-119 日本語教育学会.
- 呉禧受(2006)「韓国における日本語教師のビリーフの特徴—日本人教師と韓国人教師のビリーフの比較を通して」『ことばの科学』pp.5-22 名古屋大学言語文科研究会.
- 片桐準二(2005)「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習Beliefs—フィリピン大学日本語受講生調査から—」『国際基金日本語教育紀要』1, pp.85-100.
- 河野俊之(1994)「日本語学習一般に対する学習者の信念について」『日本語研修コース修了生追跡調査報告書』pp.77-83 名古屋大学留学生センター.
- 久保田美子(2005)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフ調査—指導内容, 指導方法を中心とした分析—」『明海大学大学院応用言語学研究紀要』pp.163-176.
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社.
- 齊藤明美(2004)「韓国における日本語教育の概観と問題点」『日本語教育研究』6, pp.41-52 韓国日語教育学会.